

戸別所得補償制度加入締切迫る

加入・非加入どちらが得か？～加工用米で最高手取りを狙う

当紙335号(3/10発行)に概要を紹介した戸別所得補償制度であるが、今年6月末で加入締切を迎える。過日、農水省が発表した5月末日現在の加入実績は約55万件であるが、農水省はさらなる加入申請を呼びかけている。最終的には100万を越すと見込まれる。一方、全農は3月末の総代会において、21年産米穀の今年10月末時点での持ち越し在庫見込みを35万トンと発表しており、消費減退ムードと相まって22年産米の価格見通しは厳しいものとなっている。農水省は米粉・飼料用米等の戦略作物の生産振興を図る一方、助成金の交付について実需者との契約を要件としている。これにより、生産者サイドが実需者のニーズをとらえて品質改善を行い、能動的に自ら販路開拓に取り組むことを求めている。

さて、今号はタイトルのとおり戸別補償制度に加入した方が得なのか？どのような形で加入すればメリットがあるのだろうか？という疑問を検証してみたい。加工用米で生産調整達成し、戸別所得補償制度への加入をすることが一番メリットがあるのではないかと考えるが、以下の試算・検証を通じて読者の皆様にもご一考頂きたい。

戸別所得補償制度の概要

検証に入る前に、戸別所得補償制度の概要を再度見ると、戸別所得補償制度において「米戸別所得補償モデル事業」「水田利活用自給率向上事業」の2つの事業の助成金が生産者に支払われる。前者は生産目標数量を遵守した生産者が、販売価格と補償対象の米価水準までの差額を全国一律の単価(15千円/10a+価格下落変動部分)で国費から交付、後者は生産調整達成の可否に関わらず水田を有効活用して麦・大豆・米粉・飼料用米等の生産を行う販売農家に対し、主食用並の所得を確保しうる水準を国からの直接支払により行うものだ。水田利活用自給率向上事業の交付単価一覧は上表の通り。

【水田利活用自給率向上事業の助成単価】

作物	単価(10a当り)
麦、大豆、飼料作物	35,000円
新規需要米(米粉・飼料用・バイオ燃料用米・WCS用稲)	80,000円
そば、なたね、加工用米	20,000円
その他作物(地域で単価設定可能)	10,000円

二毛作助成(戦略作物)15,000円(10a当り)

加入・非加入の場合の収入比較

収入額の変動を試算するに先立ち、変動要因については次の仮定条件を置く。まず生産物が全て水稲のケースで収入額の試算・検証をすると、この場合生産調整達成のための手段は、加工用米や

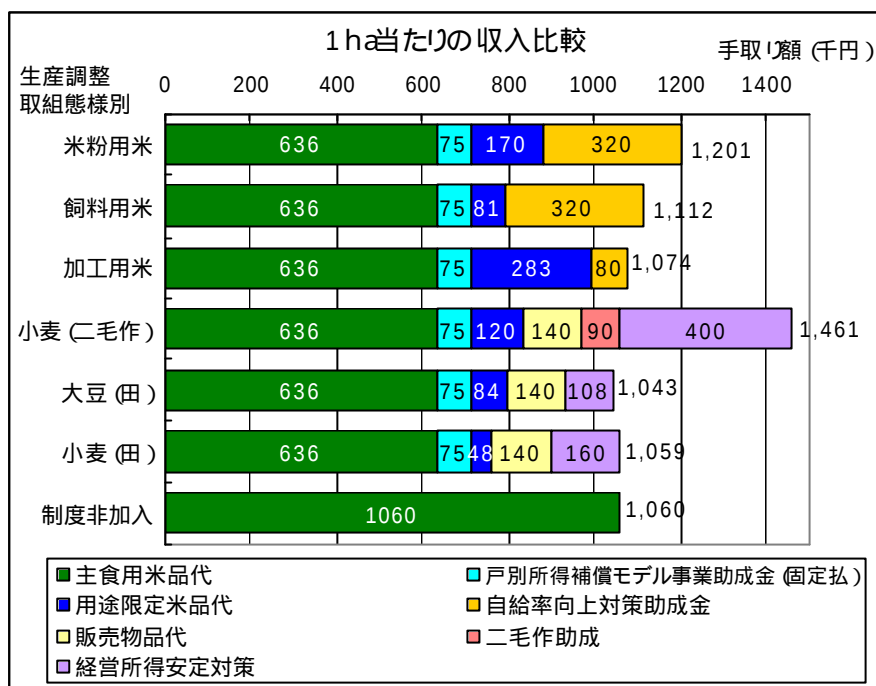
【仮定条件：農水省資料「戸別所得補償について」(H22.4)(参考1)中の試算基礎による】

- 作付面積：1ha ➢ 収穫量：530kg/10a ➢ 生産調整実施率：40%
- 販売価格：主食用12千円/60kg、加工用8千円/60kg、飼料用31円/kg、米粉用4.8千円/60kg
 麦12千円/10a、大豆21千円/10a
- 経営安定対策：麦40千円/10a、大豆27千円/10a ➢ 二毛作助成：15千円/10a

新規需要米といった用途限定米穀の生産ということになる。次ページの「1ha当たりの収入比較」表(次ページへ続く)

(前ページより続く)

により、1haの圃場において生産調整対象面積をそれぞれ加工米粉用米、飼料用米、加工用米で取り組んだ場合と生産調整に取り組まず、全面積を主食用米で作付をした場合と収入で比較した。前述の仮定条件に基づき手取り額を算出した場合、米粉用・飼料用米に取り組みながら主食用米を生産した方が面積あたりの収入額は大きくなるという結果が出た。ここで留意したいのは、この試算はあくまで収入額に基づく比較であり、仮定条件も絶対でなく、経費も加味されていないことだ。生産資材・農機に係る経費が同一だと仮定しても用途限定米穀の契約条件は様々である。例えば



同じ加工用米でも醸造用と米菓用とでも販売単価は異なるし、運賃・金利倉敷などの受け渡し条件の設定如何で経費は変動する。条件次第で戸別所得補償制度の加入メリットが減殺されてしまう可能性があるので注意。

次に生産物が麦・大豆であった場合を検証すると(上表ご参照)、麦・大豆は平成22年度の生産調整達成者は経営所得安定対策による助成を得ることができるものの、制度非加入の場合の収入額と比較した場合、小麦の収入は同等、大豆に至っては収入で下回ってしまう計算になる。特に平成21年度まで「とも補償制度」により麦・大豆に対する助成が厚かった地域は、今度の水田利活用自給率向上対策に移行したことともない、面積あたりの助成単価が減額されている可能性がある。また水稻作付面積にて小麦の二毛作を行い、二毛作助成を得た場合の面積あたりの収入も合わせて比較表に入れたので参考にしたい。

加工用米・新規需要米は販路開拓が必要

以上のように資材費・農機代・人件費といった経費は、各農業経営体の作付面積規模・機材の活用体制などに大きく左右されることから、収入面に限定して国が戦略作物として推進している物のうち麦・大豆・米粉用米・飼料用米・加工用米について戸別所得補償制度加入による収入の比較を試みた。試算の結果、収入金額では国が推奨する米粉・飼料用米の生産が有利となる結果が出たが、新規需要米の販路確保の難しさ、諸経費の負担の問題を考えると、米粉・飼料用米の取組が一概に有利とは言えないのではないかと。すでに市場の確立している加工用米の地域流通制度を利用し、加工用米として高値で販売できる実需者を開拓するのが現実的ではないかとの結論に至る。

また、手続き面で留意したい点として、麦・大豆と同様これらの戦略作物の助成は作付・収穫・実需者等への出荷販売契約に関する証拠資料を必要とする。なかでも加工用米・新規需要米は戸別所得補償の加入申請時に実需者との販売契約が求められるため、販路開拓に努力が必要であることを付言したい。自然環境もあり、各地域の選択肢は場合によっては限られたものになるかもしれないが、この記事がベストな選択で22年産の生産に取り組んで頂く一助になれば有難い。

ナント種苗の育種研究農場見学会

― 農家に生産意欲を、食卓にワクワクを」キーワードは『鈍感力』

去る 6 月 17 ~ 18 日、ナント種苗(株)の宇陀育種研究農場にて、『2010 年度宇陀育種研究農場特別見学会』が開催され、スイカ、メロン、トマト、カボチャに重点を置いた新品種の提案があった。創業 64 年目のナント種苗株式会社(奈良県橿原市)高瀬社長が、「農家さんに生産意欲を、食卓にはワクワクを」、優れた品種を開発し種子の安定供給を以て日本農業に貢献すると挨拶があった。品種開発のキーワードは、『鈍感力』である。今年も春から低温・日照不足等の異常気象で育種や栽培に苦労した同社は、近年の激しすぎる気象変化に対応した、気象の変化に鈍感な品種の開発をしている。スイカ・メロン・かぼちゃ等ウリ科植物は低温・日照不足に特に影響されやすい。そこで、今まで味に拘ってきたナント種苗の育種担当者(ブリーダー)が、生産者にとっての作り易さ、栽培方法の研究や、耐病性、そして消費者にとっては美味しく、加工業者にとっては加工しやすく、流通業者にとって傷みにくい、日持ちが良い等の各ニーズに応える開発・研究成果をそれぞれプレゼンし、出席者全員で試食した。



高い品質と多収を目指す、メロン農家にも朗報！

最近メロン栽培が、生産者にとって儲からなくなっている。手間がかかる割に病気に弱く単価が安い為、生産者の手取りが少なくなっているのだ。付加価値の高いメロン作りが困難になって、メロン栽培の魅力が無くなっている。高糖度(16度前後)で、外観は綺麗な美ネット、果肉が赤い『マリアージュ』は、立体栽培、親蔓一本で2果取りが可能な多収品種である。『アニバーサリー』は地這栽培でもアールスメロン並みの美しいネットで、糖度・肥大を維持して4果取りも可能である。

その他にも色々な品種が紹介された。業務用にカットしやすく無駄の少ない大きいビックサイズのピーマン『とんがり』。果長15センチ、果径4センチ、果重70グラム前後ある。長さ45センチ程の胴太りする細長いカボチャ、天候に鈍感であれば、天候に左右されず予定通りの生産が見込める。そして収量が多く、作り易いのも特長だ。皮の薄い食感の良いミニトマト『ピンキー』、花数が多く収量は一般品種の1.4倍。トマトにとって厄介な葉カビ、黄化葉巻病に強い『大安吉日』。皮の色が黄色で、陳列していて目立つスイカ『愛娘ひなた』、割れにくい小玉スイカ、ゼリー部分が少ない大玉のトマト。500グラムのビックサイズのスイートコーン『おおもの』、しかし驚きの糖度であった。農家の生産意欲回復と、食卓にワクワク感を与える、ナント種苗のチャレンジ精神を今後も期待したい。

いよいよ始まりましたワールドカップ。深夜帯があるものの、見やすい時間帯の試合時間なので応援している方も多いのでは？当社の前の“サッカー通り商店街”では、参加費無料の勝敗予想を開催。商店街でのみ使える商品券10万円分をかけて、岡田 JAPAN 予選3試合の得失点を予想するもの。商店街限定の商品券とはいえ、500円のお弁当が200日分！あなどれません。

編集局長：小田原次洋 アシスタント：助川尚子

電話：03-5802-2011/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>